

墨塗られた教科書



暑い八月がやって来た。今年は終戦後五十三年目のこと。「戦争を知らない僕たちなのさ」と若者が歌っていた時から二十余年が経つ。この季節に終戦を思い出す人も年々減って来ていることだろう。体験していない人にはいくら説明しても伝え得ることとは僅かかもしれない。が、やはり我々には語り継ぐべき義務があるのだと思う。

今朝ふとチャンネルを合わせたNHKで、一人の女教師が、こつこつと戦前戦後の教科書を集め、それを展示することで戦争を考えてもらう努力をしていることが紹介された。そして戦時中の教科書の表紙が写った後、彼女がばらばらとめくった一冊は、各行を黒々と墨で消されたものだった。彼女は私と同じ昭和八年生まれである。同じ体験を経た者の一

人として、私は心からその活動に共感している。

昭和八年生まれというのは、特異な体験をした年代である。尋常小学校一年生として入学したが、二年生には国民学校となり、六年生のとき終戦となった。ただの小学校となる。中学、女学校に入れば学制が変わって、高等学校の併設中学となり、四年間も最下級生のまま過ごしたのだった。

国民学校になった年の十二月八日に真珠湾攻撃があり、太平洋戦争に突入する。私の父も出征し、その年末には脚部に貫通銃創を負った。しかしその後、またも負傷したにもかかわらず、帰ることなく中国の山砲隊長として留まり、終戦まで日本の土を踏むことがなかった。

物資が徐々に欠乏していつて、米、味噌、醤油が配給といつて一人いくらという分量しか買えなくなり、その後、野菜や魚も配給になった。しかし肉が配給された記憶はない。勿論店頭にあるはずもない味付けご飯にヘットという牛脂を混ぜて炊いたものが美味しいと思っていたくらいである。

店頭からすっかり品物が消え、戦争が身近にせま
った。六年生になって、学校で五年生のときの教科
書を提出させられた。新しい教科書が不足していて
下級生に使わせるのだという。提出するとき私は丁
寧に使用していなかったことがとても恥ずかしかった。
新しい教科書が当たった私は、今度こそきれいな
ままで下級生に渡そうと思ひ、カバーを掛け、汚さ
ないようていねいに扱った。もつとも一学期も終わ
りの頃には、勉強はそっちのけで、校庭での防空壕
掘りばかりだったのだが。

夏休みになり、お盆という時に終戦となった。二
学期が始まって間もなく、教科書の中身の抹殺が命
じられた。先生が、教科書のどのページ、どの行を
墨で消すか指示される。家で墨をすり、一行一行消
してゆく。大事にしていた国語の教科書に墨を入れ
ることは悲しかった。狂言や鎌倉の歌が残ったくら
いだったろうか。

音楽の教科書はもう使われなかった。戦争に關す
る歌が多かったからだと思ふ。

しかしそのころの「たじまもり」や「船は帆船
よ」、「忠霊塔」、「無言の凱旋」など何ともいえ
ない哀調を帯びたものだった。ドイツのような戦意
を鼓舞する、調子よく元気なものではなかった。

女学校に入り、渡された教科書は国語しか記憶に
ないが、質の悪いA3版の紙に印刷されたものを四
つ折りにしただけのもので、自分で切つて綴じなけ
ればならなかった。最初が山部赤人の富士山の長歌
と返歌だった。英語も数学も殆ど教師のガリ版が主
だった。

一三年して教科書も出そろつて来た。しかし中学
でも高校でも日本史は明治維新までで現代史を教わ
ったことはなかった。

今はどうだろう。太平洋戦争の記述が外国に比べ
てぐつと少ないとそのテレビでは報道していた。量
もだが、実際のどのよつに教えられているかも問題だ
ろう。我々日本人は、自分たちの間違ひの原因にき
ちんと向き合つて、学ぶ勇氣がないほど情けない国
民ではない筈だと思つている。